

学校教育高度化センター主催シンポジウム(2010年9月11日)
「新たなカリキュラムの形成」(指定討論)

「だが、どのようなカリキュラムを、
どのようにして形成するのか？」

大桃敏行
(学校開発政策コース)

- だれが、どのようにして—①
 - 国、地方公共団体、学校、それぞれの役割
 - 専門家、保護者・住民、学習者、それぞれの役割
- どのような—②
 - 引き継ぐべきものと、新たな要請に応えるべきもの
 - 国民・市民・住民にどのような資質の形成を保障するのか、求めるのか
- ②→①

- 公教育制度の形成
 - 主権者の育成＋各人が自らの運命の決定者
 - 共通の知識、共通の機会
- 価値の多様性の承認、子どもの多様性の強調
 - 普遍性、共通性の揺らぎ
 - 平等：形式論的・補償論的解釈→参加論的解釈
 - 「空っぽの」機会と「求めるに値する」機会
(ハウ、2004)
- 21世紀で求められるもの
 - グローバル化、知識基盤社会、格差問題等への対応
 - 「基礎的な知識と技能」の習得と「知識の活用能力」の育成
 - 学ぶことの意味の問い直し

どのようなカリキュラムを形成するのか

- 考えるための枠組み

 - 市川報告：新学習指導要領

 - 佐藤報告：21世紀型カリキュラム

- 新たな構成要素

 - 秋田報告：言語力

 - 高橋報告：キャリア教育

 - 牧野報告：市民性教育・生涯学習

 - 藤村報告：リテラシー

だれが、どのようにして カリキュラムを形成するのか

- 国の学習指導要領はどの領域をどこまで定めるのか
 - 21世紀における国の役割
- 学校でのカリキュラム編成(開発)の自律性をどうとらえ、それを支援していくのか
 - 地方発、学校発改革の有効性、支援と縛り
- 教育プロセスにおける教師の役割をどう設定し、学習の成果をどう評価するのか
 - カリキュラム開発と学びのプロセス

- 標準化と自律性（基準点の保障と多様な文脈への配慮）

＜米国の例＞

スタンダード／アセスメント→統一テストに基づくアカウンタビリティ—①

規制緩和・学校の自律性→パイロット・スクール：参加型ガバナンス＋「真正の評価」—②

パイロット・スクール：統一テストでも好成績（②→①？）（黒田、2009；CCE, 2007）

- 学習者自身がカリキュラムの形成にどうかかわるのか

→学校で学ぶことと、生涯にわたって学び続けること

参考文献

- 石井英真, 2009, 「「スタンダードに基づく教育改革」の再定義に向けて—NCLB法制定後のアカウンタビリティ強化の観点から—」北野秋男編著『現代アメリカの教育アセスメント行政の展開—マサチューセッツ州(MCASテスト)を中心に—』東信堂。
- 黒田友紀, 2009, 「ボストン学区におけるパイロット・スクール改革の検討—「真正の評価」に焦点をあてて—」同書。
- ハウ, K. R. (大桃敏行・中村雅子・後藤武俊訳), 2004, 『教育の平等と正義』東信堂。
- Center for Collaborative Education (CCE), 2007, *Strong Results, High Demand: A Four-Year Study of Boston's Pilot High Schools.*